東国の太子信仰研究序説

――岩手のまいりの仏と会津の太子守宗を中心として――

門　屋　光　昭

はじめに

岩手で特徴的な民間信仰に「まいりの仏（十月仏）」がある。その信仰は聖徳太子信仰という側面からの検討が必要だと，最近，痛感している。拙稿「まいりの仏（十月仏）の祭祀（前篇・後編）」（『岩手県立博物館研究紀要』第3号・第4号，1985・1986）は多くの学術論文に引用されてきたが，20年近く前に調査し執筆したものであり，その後の信仰形態の変容は甚だしいと推測できる。また，必ずしも「まいりの仏」を総括した論文ではなかったし，太子信仰の側面から論じたものでもなかった。

聖徳太子は，「和国の教主」と称されたように日本宗教史の上に極めて重要な位置を占めているが，太子への信仰はその没後すぐに始まり，片岡山の飢人伝説のように景教（唐に伝わったネストリウス派のキリスト教）の影響さえも認めることができる。

太子信仰は天皇・皇族から被差別階層まで巾が広く，各階層各時代にわたって種々相が見られる。その研究は，林幹禰『太子信仰―その発生と展開―』（評論社，1975）など，幾つかのまとまった成果があったが，畿内を中心とするものが大半だった。だが，昨年，蒲池勢至編『太子信仰』（民衆宗教史叢書第三十二巻，雄山閣，1999）が刊行され，浄土真宗における太子信仰や東国の太子信仰（藤田定興「会津地方太子信仰の真宗的要素」1985，拙稿の「まいりの仏と太子信仰」1982，同「『北越雪譜』の黒駒太子」1987）の論文が収録されて，全体像をほぼ俯瞰できるようになった。

東国における太子信仰は，法隆寺や四天王寺，六角堂などの畿内の太子信仰が伝播したものを中心に，初期の真宗教団や高野聖・善光寺聖などの念仏僧が関わり，この地方の習俗と習合しながら独自の受容・土着化が認められる。筆者が現在進めている「東国における太子信仰の研究」は，「まいりの仏」を総括するものの，それだけにとどめず，畿内の太子信仰が東国にどのように伝播し受容され，東国の民俗と習合しながら土着したかを明らかにすることをめざしているのである。

その検討は宗教民俗学の立場で，先行研究を踏まえながら，現地調査で得た聞取り資料や文献資料・仏像仏画調査資料などの分析を通して，次のような項目で行っている。

(1)　岩手のまいりの仏

拙稿「まいりの仏（十月仏）の祭祀」の再検討。当時調査した祭祀事例百か所のうち，主要な幾つかを再調査し，この15年間の変容を考察。併せて「まいりの仏」の信仰を総括する。

(2)　会津の太子守宗

拙稿「岩手のまいりの仏と会津の太子守宗」（『東北民俗学研究』第5号，1997）で提唱した仮説，原始真宗教団と太子守宗の結びつきについて，未調査だった太子守宗の伝承地を現地調査し検証する。

(3)　秋山郷の黒駒太子

拙稿「『北越雪譜』の黒駒太子」で考証した秋山郷（新潟・長野の県境地帯）の太子信仰について，その後の研究（島田彰雄『秋山郷の民間信仰　黒駒太子』野島出版，1990）などを踏まえながら，周辺部を含めた現地再調査を行い，善光寺聖や初期真宗教団の毛坊主などとの関係から再考察する。

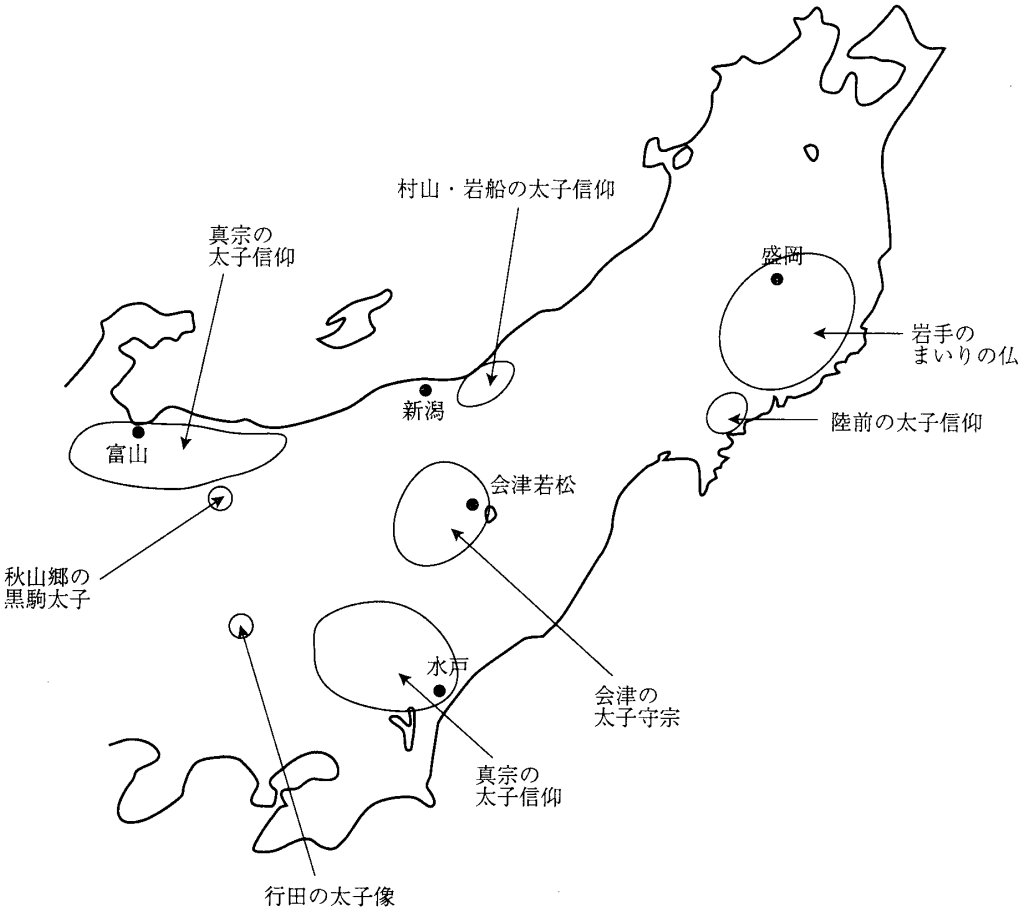

図 1.　東国の太子信仰分布図

(4)　村山・岩船の太子信仰

井上鋭夫『一向一揆の研究』(吉川弘文館, 1968), 同『川の民・山の民』(吉川弘文館, 1981) で明らかになった「渡り集団と太子信仰」について, 新潟県村山・岩船地方の現地調査を行いながら再検討。未調査地なので現段階では仮説を持っていないが, 移動民や北陸の真宗篤信地の太子信仰, 会津の太子守宗との関係を含めて考察する。

(5)　北陸・北関東の真宗篤信地帯の太子信仰

親鸞の太子信仰に基づく北陸から北関東の真宗篤信地帯の太子信仰の考察。例えば川口久雄「北陸における太子伝の絵解き」(『金沢大学日本海域研究所報告』第 3 号, 1971) で明らかになった太子傳の絵解きを行う寺院, あるいは親鸞二十四輩伝承地, 太子像を安置する真宗寺院などを調査する。

(6)　行田・天洲寺の太子像

拙稿「源実朝の太子信仰」(『盛岡大学紀要』第 14 号, 1995) で考察した実朝の太子信仰を東国という地域からの再検討する。

以上の 6 項目を中心に行っているが, 本稿は, 「岩手のまいりの仏と会津の太子守宗」を中心とする。ここでいう「太子守宗」とは, 中世から近世初頭にかけて会津地方で活動した一宗教グループで, 聖徳太子を守護礼拝したことに由来すると思われる。無本寺であったため, 寛文 4 年 (1664) の寺院縁起改めなどの会津藩の宗教政策によって転宗したり, 消滅した。親鸞の高弟中, 会津住として知られる無為子, 唯信, 唯仏などの後継者たちとのつながりが想像され, 特に南会津地域の旧太子守寺院は, 藤田の研究によって真宗高田派への集団転宗が明らかにされ, 方便法身像や孝養太子像などを祀っていたことが知られる。

なお, 前掲の拙稿「岩手のまいりの仏と会津の太子守宗」の記述と一部重複する箇所がある

が，「東国の太子信仰」という視点からの新たな論証のため，必要上のことと了解されたい。

1. 岩手のまいりの仏と会津の太子守宗

(1) まいりの仏

岩手県のまいりの仏の研究は，岩手県教育委員会の昭和40年度文化財調査「まいりの仏」を担当した司東真雄の調査研究がベースとなっている。司東は各地区からの報告を基に，所蔵者272戸と呼称・拝み日・拝む対象・祭祀の仕方・分布などを集大成した（『まいりのほとけ（十月仏）』北上史談会，1977）。その後，筆者も百か所ばかりの所蔵家を訪ね，その祭祀の有り様を調査し，幾つかの報告や論文(註1)をまとめたが，司東の論考で今も魅力的だと感じているのは次の点である。

司東はこの信仰について，「岩手県地方へ真宗が入ってきた初期の布教の姿を示しつつ江戸期に入り，キリシタン弾圧以降，寺と檀家との結びつきができてから，各宗系の庶民が真宗系の同族信仰形態をまねて，今日まで存続させたものと思われる」と示唆している(註2)。

また，別に「かくし念仏　御内法」（『日本の民俗宗教2』1980）で，「親鸞をはじめ弥陀念仏門の僧たちは最初から『在家仏教』の確立をねらい，その土地ごとに一族の長へ草鞋をぬぎ，一族が信仰する家へ集い，『名号』の軸をおき，その軸は一族の共有物として，族長の家を『仏別当』といい，祭祀権を与えた。葬式も『仏別当』の役になった」とし，さらに「この『仏別当』という『在家仏教』の中核があって，やがて『かくし念仏』の素地をつくったとみられる」という論を展開している(註3)。

まいりの仏は，オンネェサン・十月ポトケ・カバカワサマ・タイシサマ・オヒラサマなどともいう。旧暦10月の定例日に，阿弥陀如来や聖徳太子などの掛図，あるいは聖徳太子などの木像を祀る民家や民間のお堂に，同族縁者などが集まり，お詣りする信仰である。寺のなかった時代，野辺送りに棺につるして墓に持って行き，「引導仏」にしたとか，「仏の月」である10月の先祖供養の本尊にしたとか伝承されている。だから，筆者は「十月仏」と総称するのがこの信仰の特徴を最もよく表している，と指摘してきた（「仏の月の伝承と十月仏―まいりの仏再考―」1987）。

分布は，岩手県のほぼ全域に及ぶが，特に県中南部の紫波・稗貫・和賀・江刺地方に密度が濃く，次いで遠野から気仙地方にかけて多い。一方，県北部は少なく，沿岸北部でも祭祀が失われつつあるが，古い掛図を所蔵している旧家は決して少なくない。

拝む対象となる仏の形態は，木像と画像とがあり，大半は阿弥陀如来・六字名号・孝養太子・黒駒太子などの掛図で，地域によっては聖徳太子の木像もかなりある。例えば，県中部では画像が中心であるのに対し，気仙地方では聖徳太子木像が圧倒的で，同じ気仙地方でも住田町では画像と太子木像が相半ばする。また，県中南部でも太子木像を単独で祀るところもあるし，紫波・稗貫地方では阿弥陀如来像・六字名号・

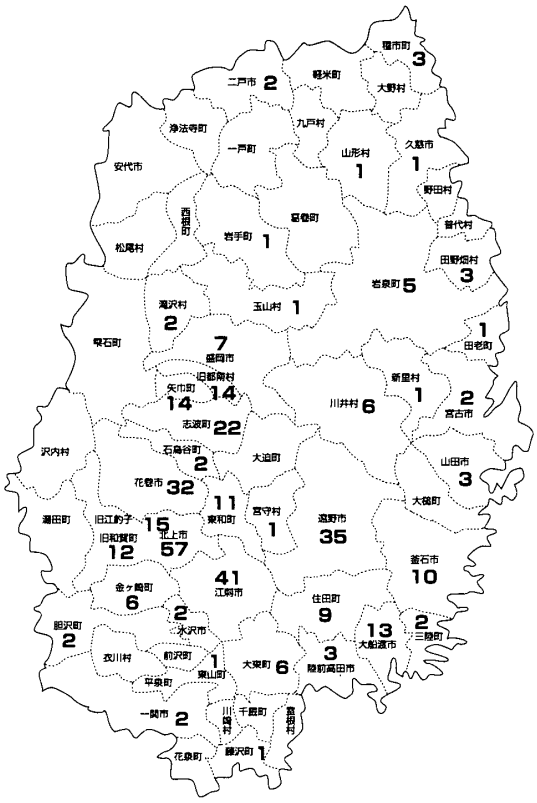

図2. 市町村別まいりの仏（十月仏）分布図
（拙稿「まいりの仏（十月仏）の祭祀」所在一覧表より作成）

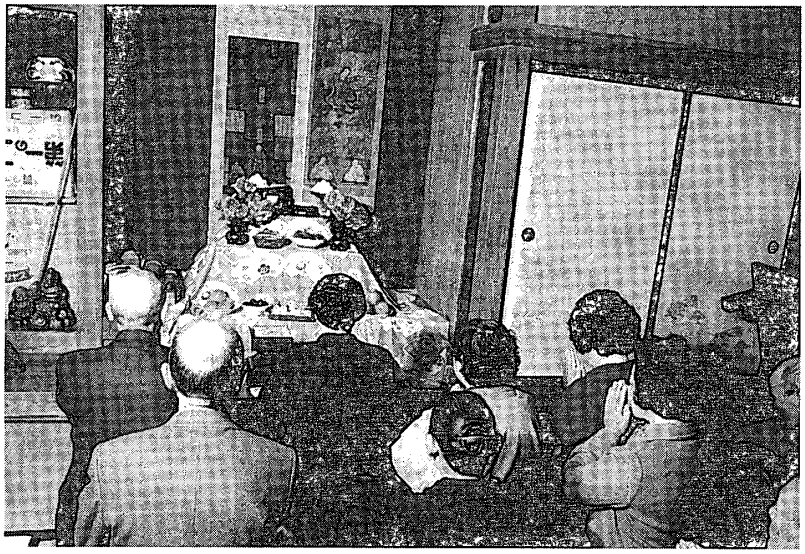

写真 1.　まいりの仏の縁日（岩手県東和町）

写真 2.　太子さま（岩手県陸前高田市）

黒駒太子（または孝養太子）像などの三幅形式が多く，和賀・江刺地方では数幅以上を祀るところが目立つ。

ただ，拝む対象は必ずしも阿弥陀如来像や聖徳太子像などに限られているわけではなく，オシラサマ・地蔵形の小像や石などの場合もある。また，対象とする木像や画像などがなくとも，旧暦 10 月にまいりの仏とほぼ同様の祭祀を行う地域がある。遠野地方では 10 月をホトケヅキと呼び，旧家では親類縁者が集まって先祖供養をするゴシュまたはゴヒという行事がある。仏月に行うこのゴシュ行事は，広く上閉伊・下閉伊地方に見られ，遠野市綾織町から上閉伊郡宮守村のほぼ全域と和賀郡東和町の一部ではホトケノバンゲ，下閉伊郡川井村小国ではカバカワ，同郡山田町関口や織笠ではゴヒという。

拝み日は，旧暦 10 月にほとんどが集中し，先祖や先代の命日を 10 月に移した例が少なくない。少数だが，正月 16 日や盆の 16 日に拝む家もあり，正月 16 日の場合はオシラサマと習合している例が多い。

ところで，何故，10 月を拝み日としたのであろうか。筆者はその理由を明快に答えることができない。司東は，親鸞二十四輩の一人で和賀門徒を築いた是信の命日が 10 月 14 日なので，それとの関係をほのめかした(註 4)。確かに是信に結びつける伝承がないわけではないが，肝腎の 10 月 14 日そのものを拝み日にしている家はそう多くない。

また，掛図の図柄の一つ「連座御影」は，孝養太子像の上部に浄土七高僧，ないしは六高僧が描かれているが，高僧の一人が是信の場合がある。和賀郡東和町の熊谷基家蔵の「連座御影」がそれであるが，それをもって普遍化できるほ

ど事例があるわけではない。青森県西津軽郡鰺ヶ沢町の来生寺所蔵の「連座御影」にも，熊谷家蔵のものと同様に親鸞に次いで是信が描かれている(註5)。和賀門徒を築いた是信の法系を示しているので重要ではあるが，ここで取り上げている民間のまいりの仏の信仰に関わる掛図ではない。

10月を仏月とするのは，神無月からきたのであろう。筆者はかつて竹内利美氏から十月仏は長野のルスガミや高知のルスイガミと関連はないだろうか，と問われたことがある(註6)。ルスガミやルスイガミは，確かに神々が出雲に立たれたあとの留守を護る神で，所によってオカマサマであったりエビスサマであったり，あるいは山の神や道祖神，コンピラサマ，オイゲサマなど様々である。しかし，まいりの仏には留守を護るという伝承はなく，その関連は残念ながら解明できないでいる。

行事内容は，まいりの仏を信仰する人々が仏を所持している家(一族の総本家的な旧家，「仏別当」と呼ぶ所もある）に，賽銭・米1升などを持って集まり，各自で，あるいは一緒に念仏を唱えたり，まれには隠し念仏の導師の音頭で「正信偈」を唱和したりして拝み，1汁3〜5菜程度の精進料理で共同飲食をして解散する。

帰りには供物のダンゴやマンジュウなどがお返しとされる。司東は，このダンゴはショウコダンゴと呼ばれ，受領書的な役割があったという(註7)。だが，司東や筆者が住む北上地方では葬送の際に用いるダンゴを焼香団子と称しているので，司東がいう意味ではないと思っている。ダンゴは，家に持ち帰ってオマブリとして家族で分けあって食べる。

ところで，仏を所持する家，あるいは当主を「仏別当」と呼称するという伝承は重要である。和賀郡東和町安俵の及川浄家では，この信仰をまいりの仏，または屋号から「金毘羅仏」と呼び，拝み日は旧10月15日，仏の形態は画像4幅で，その内訳は放光阿弥陀如来像2幅，孝養太子像，六字名号である。その掛図は昭和46年に修復が行われたが，それ以前の軸が保存されており，文政5年（1822）の表具銘「文政五壬午年七月/表工師臥牛村石橋□(直)理/世話人中内村忠蔵/松太郎/長七/佛別當安俵村清七/阿弥陀如来二帖/聖徳太師一帖/以上三帖/表具代紙代共ニ壱貫六拾文」とあった。

「仏別当」という呼称は死語に近く，筆者の他家での調査では伝承としても聞くことができなかった。だが，司東は，「仏別当」とはっきり書いた箱とか，軸裏銘もあって，本来は同族の共有所有だったものが，本家が保管したことを証しうるものであるという(註8)。同族の共有所有という点では疑問もあるが，まいりの仏の所有者であり保管者を「仏別当」と称したことがあったのは確かであろう。

岩手では，村社や無格社などの小さな神社，集落や個人で祀る山神社・蒼前社・観音堂・地蔵堂などの小祠堂には，持ち主であったり管理したりする者を「別当」と呼んでいる。さらに山伏神楽で用いる獅子頭をゴンゲンサマと呼び，神の分霊として篤く信仰されるが，その保管者も「別当」である。だから，まいりの仏の場合も「別当」と呼ばれて違和感はないのである。

筆者が及川家を調査した昭和59年頃，同家への参拝者は2〜3人となっていたが，つい近年まで12〜3人くらいあり，稗貫郡石鳥谷町八重畑からも5〜6人が来ていたということだった。八重畑から安俵まで十数キロメートル，藩制時代ならそう近い距離ではない。信仰圏は意外に広いのである。

北上市稲瀬の千田家では，祭日は新11月13日（もとは旧10月13日）で，阿弥陀如来・六字名号・孝養太子・黒駒太子・聖徳太子一代図などの12幅の掛図（一部が県指定）を祀るお堂（修験道場）に本家分家近隣など5軒の人達（以前は30軒くらい)が集まって拝み，精進料理で共同飲食する。この掛図の裏には文久2年（1862）の「為先祖代々菩提」という修復銘があり，結縁した人達の名前と村名が記されており，地元稲瀬村ばかりか，下門岡・水押村を始め，藩境を越えて南部領の更木村（いずれも現在の北上市）と信仰圏はやはり広いのである。

この仏を一度拝むと一生拝まなければならず，嫁に行く娘は行事に参加させないとか，こ

の仏がおられるので二足四足は食べないとかいったタブーが多く，少ないがキュウリを植えないとか，白い脚の馬は飼わないというのもある。

火事のとき飛んできたとか，川に流したところ遡ってきたとか，旅の六部や落人が伝えたという伝播伝承がある。また，県中南部の場合，是信及び浄土真宗の布教者，善光寺聖や高野聖などの遊行僧，聖徳太子信仰を担う集団などによって伝えられたと考えられる。

なお，先に触れたカバカワサマは，下閉伊地方を中心に分布するが，北上川流域地方でいうまいりの仏と同種の信仰である。ただ，礼拝対象とする掛図などがなくとも，旧暦10月に「カバカワの日」として，同族縁者が集まり先祖供養する家も少なくない。

柳田国男は「樺皮の由来」（『雪国の春』）で，久慈から釜石の閉伊二郡の村々では，旧家というよりは「カバカワの家」と呼ぶ方が分かりが早い。カバカワは白樺の樹皮を利用した一種の紙で，是非とも後に伝えなければならないものを描き，特に必要だったのは阿弥陀様の御影や六字の御名号。野の末森の奥の人生には，一巻の古い樺皮によって救済せられることが多く，塚の松に名号の一軸をかけて，村の者ばかりで死者を取り置きしたそうだという話が至る所で語り伝えられている(註9)，と興味深い指摘をしている。

(2)　秋山郷の「黒駒太子」とまいりの仏

地方に伝播した太子信仰の土着化という視点でまいりの仏を考えようとするならば，秋山郷の「黒駒太子」を見過しにするわけにはいかない。

越後と信濃の国境にある秋山郷（新潟県中魚沼郡津南町と長野県下水内郡栄村）に伝わる黒駒太子は，江戸後期の鈴木牧之の『北越雪譜』や『秋山紀行』に記されているように，死者の上で2,3回振って引導を渡すときに用いられており，まいりの仏と同根の信仰であるといえる。

すなわち，『北越雪譜』の「秋山の古風」には，「冬は雪二丈余もつもりて人のゆきゝもたゆるゆゑ，此時人死すれば寺に送る事ならざれば，此村に山田を氏とする助三郎というものゝ家にむかしより持伝へたる黒駒太子と称する画軸あり，これを借りて死人の上を二三べんかざし，これを引導として私に葬る。寺をさだめざるいぜんはむかしよりこれにてすませたり」とある(註10)。

また，『秋山紀行』には，「我等が寺は椈山の龍言寺にて，次第に世が驕に成り，雪無き時分は，菩提處より引導師とやらが来て取り置くなれ共，己若き時分は，夏冬共に此黒駒太子の懸もので，何の村方よりも借りに来て，是を死者のうへに三遍廻すが古例引導なり。故に雪の中四五ケ月は菩提寺へ無沙汰にて，銘々此太子の絵像の箱に入れたを惣秋山中の借りて，返す時は布施として，身上に応じ，廿五文の，三十文の，又は身上能きものは百文も施物添へる也」とある(註11)。

現在，この黒駒太子像を所蔵しているのは「如来さま」と呼ばれる阿部家で，1986年11月に筆者が小赤沢の同家を訪ねたときの当主は阿部滝義さんであった。氏は黒衣を着て，同家の太子堂に案内し，黒駒太子画像と孝養太子画像とを広げながら，鈴木牧之が来た文政11年（1828）の頃の信仰が今も生き続けている話をしてくれた。

それによると，現在では冬でも除雪されるので，葬式に津南町の旦那寺の住職を呼ぶことができるが，今でも「如来さま」である自分が同時に招かれる。そのときには黒駒太子画像，または孝養太子画像を箱に入れて持って行き，死者の頭の上でその箱ごとイダナカセル（2〜3回動かすこと）のだそうだ。息をひきとる前に，ぜひ拝ませて欲しいという人も多く，同様に頭の上でイダナカセルと，安らかに息をひきとる。病気平癒を願う場合も同じようにするし，普段から黒駒太子を信仰していると，天然痘などの悪疫が流行してもかからないという。また，山村なので山仕事での事故が多く，死者が出ると所祓いといって，太子像が入った箱を2〜3回動かして浄めるという。

太子堂のことは『秋山紀行』にも「九尺四方

の草堂」と記されており，現在では間口3間・奥行6間の堂々とした建物であった。縁日は旧暦2月15日で，「如来さまの祭り」と称して涅槃図が祀られる。終日，モチなどを上げる参拝者でにぎわうが，聖徳太子像はこの日は開帳しないで，正月15日と8月15日に行うという。この日は涅槃会で，祀られる本尊が釈迦如来の涅槃図なので，ここから「如来さま」の名称が生まれたのであろうが，普段，願い事があって奉納している旗には「聖徳太子如来」と書くことから，太子と如来の混同は早くからあったのかもしれない。

なお，黒駒太子像は，全幅53×全長164センチ，本紙幅37.5×長100センチ，紙本。黒駒に乗る太子と従者調子丸とを中央やや上段に描き，下段には小野妹子・蘇我大臣馬子・百済□□覚哥・聖明王太子阿佐の4人が見上げている図柄で，通常の登嶽図にある富士山は描かれていない。また，孝養太子像は，全幅54.8×全長147センチ，本紙幅38×長82センチ，紙本。美豆良を長く腰まで垂らした太子立像を画面いっぱいに描き，柄香炉を両手で持つ。岩手のまいりの仏に共通する図柄である。

阿部さんによると，聖徳太子像はもとは7幅あったといい，嫁入りに持たせたり焼失したりして，現存するものは，現在同家に所蔵する2幅と中魚沼郡中里村田代の桑原徳松家所蔵の黒駒太子像である。ちなみに，東洋文庫『秋山紀行・夜職草』（平凡社）の巻頭「注四」に掲載されている写真「黒駒太子の御影」は桑原家のもので，筆者が同家で確認したところでは画像を収める箱の裏蓋に文化10年（1813）の修復銘がある。当主によると，時代が不明だが，阿部家から嫁に来た者が持参したと伝えられているということだった。

阿部さんはこの桑原家を「田代の如来さま」と呼んだが，桑原家当主に確認すると，特にそうした呼名や伝承はないということだった。ただ，秋山郷でも越後側の上結東や前倉には「如来さま」と呼ばれる掛図を所有する家が数か所あって，小赤沢の阿部家の聖徳太子像と相似た効用を持つものとして近年まで篤く信仰されてきた

写真3. 秋山郷の黒駒太子（長野県栄村）

という。

筆者は結東の滝沢作蔵家を調査したが，ここの「如来さま」は涅槃図で，旧暦2月15日を「釈迦如来さまの日」と称して，床の間に軸をかけて祀り，ムラの人達が30人くらいお詣りにくる。拝み方や唱え言葉は特に決まりはなく，供物は耳ダンゴ（米の粉に大豆を入れて練り，ゆでて，耳の形に切ったもの）。人が息をひきとるときに，この軸をイダナカセルと楽になるというが，葬儀には小赤沢の如来さまが昔はきたので，用いなかったそうだ。

(3) 会津地方の太子守宗

東国の太子信仰を考える上で，福島県会津地方の太子守宗が重要であることを知ったのは，藤田定興の論文「会津における太子信仰―太子守宗をめぐって―」（『尋源』20号，1977），及び前掲「会津地方太子信仰の真宗的要素」（『高田学報』74, 1985）によってである。藤田論文は気仙地方の太子信仰調査の聞取りに来られた原田文太郎氏から教えられたもので，氏にも「中世東北の聖徳太子像と太子信仰の諸相（前編）」（『福島史学』第44号，1987）や「福島の太子信仰の初期真宗的性格と善光寺信仰との関わり」（福島県北高等学校社会科研究会『社会科研究』第18号，1987）などがある。

藤田によると，福島県の会津地方，正確には

新潟県東蒲原郡津川地方を含めた旧会津領内には，聖徳太子像を中心とする太子信仰がある。これは「太子守宗」と呼ばれているもので，会津という一地域に中世から近世にかけて存在し，教団化・組織化はされなかったが，庶民，特に農民の信仰を集めたという。

その指摘では太子守宗を名乗っていた寺院は二十三か寺で，①『新編会津風土記』，②『会津寺院縁起』，③『会津堂宇縁起』などによって知ることができる。『新編会津風土記』は旧会津領の地誌で，寛文6年（1666）の『会津風土記』を補完したもの。編纂事業は享和3年(1803)に始まり，文化6年（1809）に完成した。ここには，太子守宗十七か寺が記されている。また，『会津寺院縁起』と『会津堂宇縁起』は，会津藩の寺院整理政策に深く関わる資料で，『新編会津風土記』と重複があるが，太子守宗七か寺が記されている。

江戸初期，藩主保科正之の主導によって領内の神仏分離や淫祠破却，寺院整理が進み，神社保護に基づく宗教政策が確立して行くが，太子守宗の衰微消滅もこうした藩の宗教政策が深く関わっている。

例えば，会津藩『家世実紀』巻之七十四の元禄4年（1691）9月8日条には，「太子寺宗断絶并無本寺破却被仰付」の記事がある。藩では幕府の寛文4年（1665）などの寺院法度を受けて，領内の寺院縁起などを吟味し，「無本寺」の寺院などを破却したことがわかる。太子寺宗（太子守宗）は「無本寺」なので破却されたのである。

だが，一部に破壊を免れたものがあったらしく，元禄4年に真ケ沢村（西会津町奥川）の西光寺と天寧村の長福寺が再吟味された。その結果，西光寺は曹洞宗に転宗を希望したので存続され，長福寺は破却された。また，新堀村の法泉寺と軽井沢村の栄松寺も同様に「無本寺」なので破却されたのである。

ちなみに，西光寺以外の三か寺は，藤田の指摘した太子守宗二十三か寺には入っていないから，太子守宗の実数はまだかなりあったのだろう。原田は前掲「福島の太子信仰の初期真宗的性格と善光寺信仰との関わり」の巻末「表IV太子守寺院」で30か寺院を示し，寺名・住所・変遷・太子像の製作時期・太子守宗時代の什物などを一覧表にしている。昨年から筆者もその確認を急いでいるが，未だ所在が不明な寺院が幾つかあり，著者のご教授を得なければならないと思っている。

太子守宗は，主に南会津や耶麻郡西会津地域から旧会津領の新潟県東蒲原郡にかけて分布し，会津若松と大沼郡の一部地方にも見られる。会津若松の盆地を除けばいずれも山村で，寺は山裾あるいはその近くに散在している。また，宗派的には西会津では浄土宗，南会津では真宗というふうに，浄土系の寺院が多く分布している地域に見られる。

藤田の研究で特に興味深いのは，南会津の十一か寺が承応4年（1655）にまとまって真宗高田派に転宗したため破却を免れ，現在まで存続していることである。こうした寺々には鎌倉末期から南北朝時代の阿弥陀像や室町時代の太子像が安置されていたり，太子連座図や略絵伝が伝えられているという。

そうして太子守宗が寺院形態をとったのは江戸初期で，それまでは教団に組み込まれる以前の真宗の一派で，聖徳太子を守護礼拝する太子の徒であった。この太子の徒は，14世紀末から15世紀初頭には存在していて，親鸞の弟子であった無為子や唯信，唯仏のあと，教団と関係を持たずに会津に根を下ろした後継者達ではなかったかという。これは，まいりの仏でも親鸞二十四輩の一人で和賀門徒をつくった是信とその後継者の存在が信仰の成立に何らかのかかわりを持っていることと同じである。

さて，筆者も藤田や原田の論文を手がかりに，1999年の8月と9月にこの南会津十一か寺を調査したのを手始めとして，2000年3月には新潟県東蒲原郡津川地方などの調査を行った。南会津では近年の火災で安照寺（南郷村）の太子連座図や略絵伝などが焼失し，藤生寺(田島町)でも本堂や庫裏が焼けて古文献類を失ってしまったが，ここでは幸い太子堂と太子像は罹災を免れていた。

総じてどの寺でも藤田が報告している以上

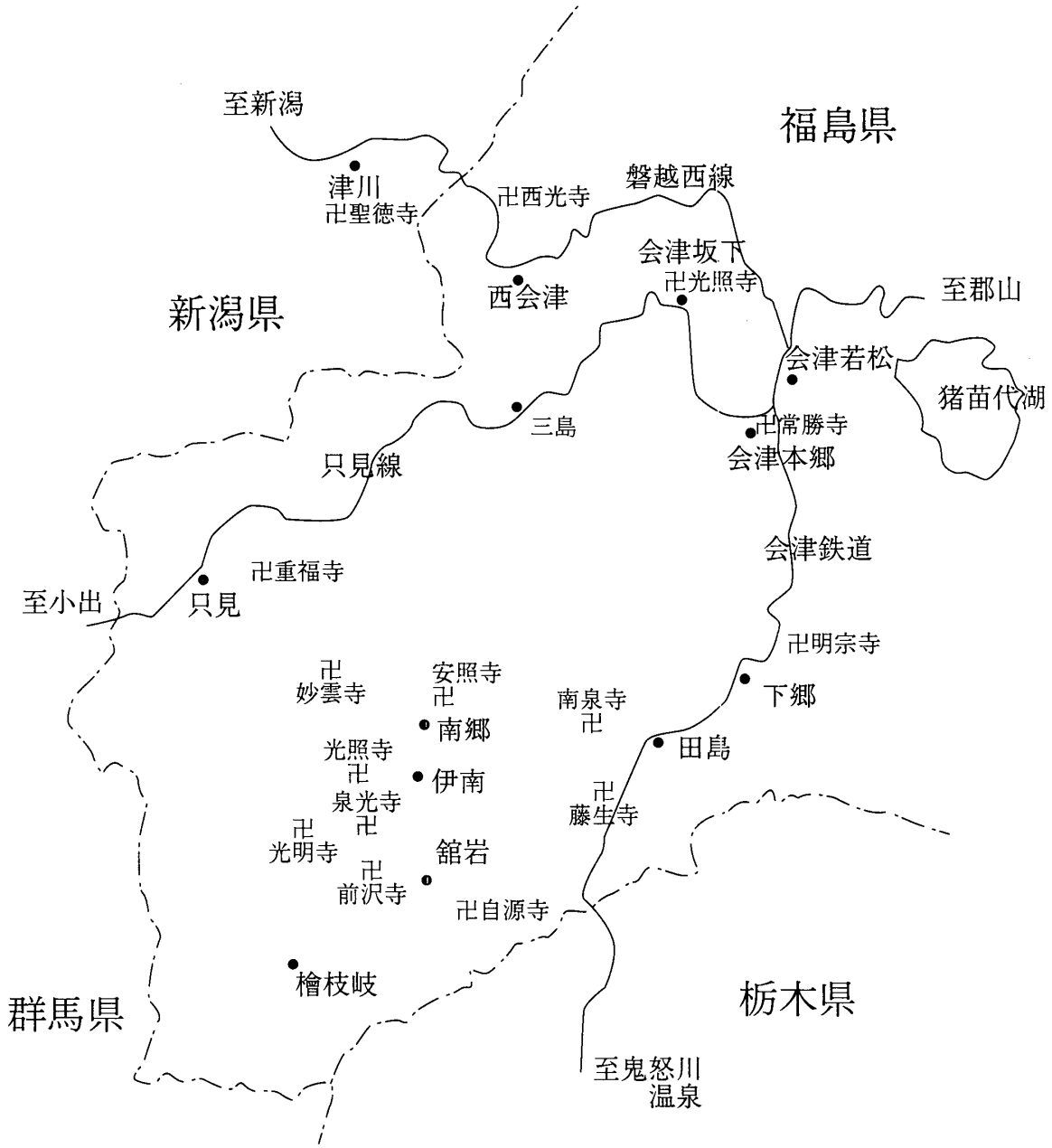

図 3.　会津の太子守宗関係略図

の，新たな資料は発見できなかったし，太子信仰を中心とする民俗伝承の聞取りでも成果を得ることはできなかった。高田派に帰属したことで寺は守れたが，民間の太子信仰の慣行は失ったように思えた。ただ，光明寺（伊南村）の「竹布阿弥陀如来曼荼羅」や妙雲寺（只見町）の「砂荒仏」のような方便法身阿弥陀如来画像には民俗信仰がかすかに付随しており，まいりの仏で最も多い図柄である放光弥陀如来との比較に手がかりを与えてくれるように思えた。

かつて太子守宗だった寺院のうち，南泉寺（南会津郡田島町静川），藤生寺（同町藤生），西光寺（耶麻郡西会津町奥川），華蔵寺（河沼郡柳津町郷戸），浄光寺（耶麻郡倉川村），東善寺（新潟県東蒲郡津川町）などで聖徳太子像を本尊としており，その他，光照寺（南会津郡伊南村宮沢），南光院（耶麻郡西会津町下野尻）にも太子堂がある。いうまでもなく太子堂の本尊は聖徳太子像だから，もとは太子像が祀られていたのであろう[註12]。

『会津堂宇縁起』二十三巻には，南泉寺と藤生寺に関する記事がある[註13]。

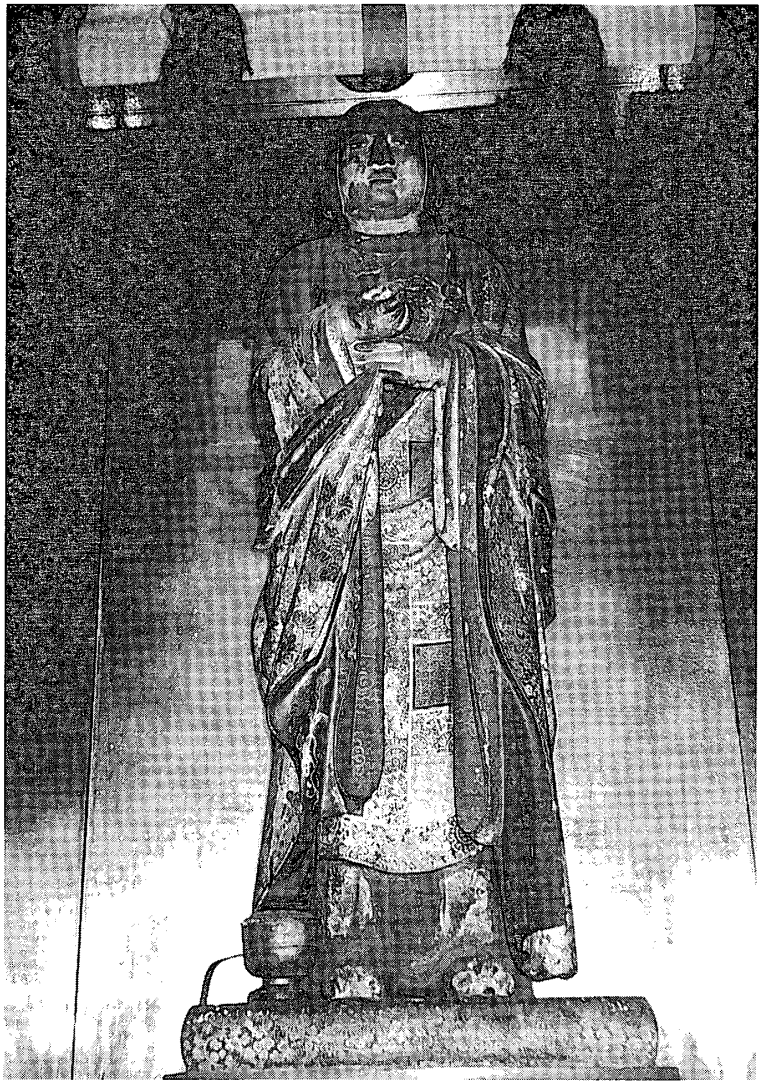

写真 4.　藤生寺の聖徳太子像（福島県田島町）

太子守松見山南泉寺
奥州会津南山大豆渡村南泉寺，丁若松御城下西南隅，相去七十里，山号寺号開基由来不詳，干爰従道善善良迄四代称弥陀聖徳太子二佛，朝昏不怠唱念佛，救度諸旦那，従上古到今歳，謂太子守者也，謹奉捧焉。
南山高野組大豆渡村松見山南泉寺
干時寛文五乙巳歳五月上旬　　善良

太子守龍谷山藤生寺
奥州会津南山関本御藤生村藤生寺，當津陽城西南隅，相去七十四里，山号不識由，以村名雖付寺号，開基年数不明，寺内南北十間東西十二間，干爰元養元作元清元栄迄四代，安置弥陀聖徳太子二尊，朝暮不怠唱念佛，受利益諸旦那，従上古到今歳，謂太子守者也，謹奉捧焉。
南山川嶋組藤生村龍谷山藤生寺
干時寛文五乙巳歳五月上旬　　元栄

すなわち，南泉寺では「称弥陀聖徳太子二佛，朝昏不怠唱念佛」，藤生寺では「安置弥陀聖徳太子二尊，朝暮不怠唱念佛」とあるように，阿弥陀如来像と聖徳太子像を祀り，唱導念仏を怠りなく行う寺であり僧であったことがわかる。阿弥陀如来と聖徳太子といえば，先に記した秋山郷小赤沢の太子堂と「如来さま」を思い起こす。木像と画像との違いや引導仏としての役割の有無などの問題はあるものの，秋山郷の太子堂を「太子守宗」と言い換えても別に違和感はないの

である。

また，先にあげた寺院の中で，西光寺は「大坂天王寺末寺」を名乗り，縁起を四天王寺と結びつけている。四天王寺は，用明天皇2年(587)の物部守屋合戦に勝利した聖徳太子が建立した寺院で，古代から中世にかけて聖徳太子信仰の拠り所の一つであった。その地は極楽浄土の東門に位置し，本尊救世観音が応現したのが聖徳太子で，極楽浄土の救い主と信じられた。

『梁塵秘抄』に，「極楽浄土の東門は難波の海にぞ対へたる　転法輪所の西の門に念仏する人参れとて」(巻二)と謡われたように，彼岸に四天王寺の西門から海に入る夕日を拝して極楽を観想する「日想観」が流行した(註14)。だから，聖徳太子像を本尊として祀る太子守宗の西光寺が，縁起を四天王寺と結びつけたのも，充分にうなづけることである。

また，その太子守宗の僧は，藤田によると，太子堂の堂主的な存在であったらしい。呪術的性格の強い念仏聖の類で，太子信仰を広めるとともに，安産・除病・火災除・雷除などの現世利益を祈禱したという。だとすれば，岩手のまいりの仏の「仏別当」のような者で，いわば初期真宗の「毛坊主」がさらに世俗化したような存在が考えられる。それは秋山郷の「如来さま」にも共通する民間の堂守でもあった，と筆者は考えたいのである。

2. 東国の太子信仰の担い手

岩手県各地のまいり仏は，地方に伝播した太子信仰の土着化した姿としてとらえることができる。また，秋山郷の黒駒太子や会津地方の太子守宗も同列と考えることができる。岩手のまいり仏，秋山の黒駒太子，会津の太子守宗は，それぞれの地域で，太子信仰が他の民俗信仰や民俗慣行と習合し合い，多少の地域差を持って土着しているからである。

筆者は，こうした太子信仰の伝播者として，善光寺聖や高野聖などの念仏聖，聖徳太子信仰の担い手などを想定しており，また，その一つに初期真宗教団の担い手達の存在を考えている。

前掲『太子信仰』に収録された二つの筆者論文の解説で，編者蒲池勢至は，「(門屋は) まいりの仏や秋山郷黒駒太子における信仰と伝播の問題について，初期真宗と真言宗新義派の布教者，あるいは善光寺聖といった遊行僧によるのではないかと結んでいるが，この仮説が具体的に論証されることを待ちたい。」と，次なる課題の論証を促している。これを絞り込んで，「東国の太子信仰の伝播者は誰か」と問い直すと，論証すべき課題の焦点はより明快になると思う。

筆者の仮説のうち，太子信仰の担い手としての善光寺聖に関しては，岩手県花巻市矢沢の村本昌宣家蔵のまいりの仏(善光寺参詣曼荼羅)を次のように報告したことがある(「参りの仏 (十月仏) と善光寺聖」『矢沢地区文化財報告書』1989)(註15)。

今回，花巻教育委員会の調査で明らかになった花巻市矢沢の村本昌宣氏蔵の「善光寺参詣曼荼羅」は，まいりの仏 (十月仏) の伝播者を考える上で極めて貴重な発見だと思う。その写真を調査担当の根子英郎氏から見せられたとき，私は自分の仮説の一つが思いがけないところから裏付けられたことに驚いた。この図柄は，善光寺聖に黒駒太子像よりもストレートに結びつくのである。しかも，後の修復銘の中に「天文十四稔十月中五日干時文化五稔辰六月十八日□今年□□凡二百六十有餘歳」とあり，「天文十四年 (1545)」という具体的な時代が浮かび上がってくるのである。

「善光寺参詣曼荼羅」は，後世，表装し直したときに書いたと思われる銘には「善光寺三ぞんあみだ如来」とあるが，その図柄から見て「参詣曼荼羅」であろう。上段中央に阿弥陀三尊の安置する本堂とその前に座る三僧，下段中央に仏を安置する五重の塔と僧及びその僧を拝す人々を画き，そして周辺には種々様々な仏を祀るお堂で取り囲み，また，本堂と五重の塔の間には，鉦鼓を叩く念仏僧，琵琶法師，ササラすり，鼓や羯鼓を打つ白拍子などの芸人達が描かれ

ている。下段の仁王門と塔婆を書く僧や剃髪する僧，塔婆を担ぐ僧，墓地で読経する僧と泣き悲しむ女なども目につく。

描かれた全体の風俗は中世的である。例えば侍烏帽子をかぶり扇を持って芸能に見る武士，折烏帽子・頭巾・市女笠・かつ衣をかぶる参詣人，曲げものを朸(おうご)で担ぐ行者，そして念仏僧・琵琶法師・ササラすり・白拍子などの芸人達，これらから室町時代の寺社境内の様相と考えて良いのではないかと思う。

ただ，阿弥陀三尊は「善光寺式」と称される「一光三尊」ではなく，両脇の観音菩薩，勢至菩薩には，それぞれに後背がある。また，「牛にひかれて善光寺詣り」や「踊り念仏」など，善光寺の特徴を表している図柄はなく，伽藍配置や全体の雰囲気から見て，善光寺であろうと推測できる程度であり，室町時代の善光寺の実態とここに描かれている周辺のお堂との比較検討がぜひとも必要であると思う。

しかし，こうした掛け図が善光寺聖の手によって遠く岩手まで運ばれ，やがては参りの仏（十月仏）として定着したことは興味深い。

その後，岩鼻道明は「善光寺参詣曼荼羅の周辺―善光寺・戸隠信仰と“まいりのほとけ”」(『月刊百科』325, 1992) で，まいりの仏と善光寺聖の関係を論じた。岩鼻は，岩手県の盛岡市中央公民館蔵のまいり仏（善光寺参詣曼荼羅）と，筆者の報告した村本家蔵のまいりの仏（善光寺参詣曼荼羅）とをもとに論証したのである。

また，長野市立博物館では平成10年度特別展「古代・中世人の祈り―善光寺信仰と北信濃―」(1998.4) で，「善光寺信仰の地域的展開」の事例としてこの二幅のまいりの仏を展示した。この図録には岩鼻が「描かれた善光寺と記された善光寺」を寄稿している。

岩鼻は，花巻市の村本家に伝わる「まいりの仏」の掛図には「善光寺三ぞんあみだ如来」と記された修復銘がみられると，拙稿の『岩手民間信仰辞典』「まいりの仏」の項を引き，続いて，「画面には阿弥陀三尊を祀る本堂と五重塔や死者供養の石塔や卒塔婆，参詣する女人の姿などが描かれていますので，室町時代の善光寺境内の景観表現とみてまちがいないでしょう。」といい，まいりの仏の掛図には「太子黒駒図」などのバリエーションがあり，善光寺聖の東北地方への布教に関連するものと思うという(註16)。筆者が気づかなかった死者供養の石塔や卒塔婆，参詣する女人の姿など，善光寺信仰の肝腎なところが指摘されており，さすがである。

なお，図録には，盛岡市中央公民館蔵のまいり仏（善光寺参詣曼荼羅）は「まいりの仏用具」として，「まいりの仏とは，岩手県を中心に旧暦10月の定例日，同族縁者が集まり阿弥陀如来の掛軸などを拝む習俗である。本例寺院景観を描いたものとして数少ない資料で，本堂の形などから善光寺姿を表すと見られている。」と説明されている(註17)。

掲載写真を見ると，阿弥陀如来像が両脇仏を持たない独尊なのが気になるが，本堂や五重塔などから善光寺で間違いないのであろう。本尊前の二人の人物は，図録にある茨城県の妙法寺の摺仏が参考となる。また，境内の参詣者や物売り，芸能者がいて，村本家のものと同様に興味深い。

ところで，岩鼻も指摘したように，黒駒太子像は善光寺聖の布教と関わっている。この太子像はまいりの仏の中でもかなり多い図柄で，通常三段に描かれている。下段は甲斐国から聖徳太子に献上された黒駒を太子と蘇我馬子や小野妹子・僧恵慈などが眺めている図。中段は太子が調子丸を従え黒駒に乗って富士山に登る姿で，いわゆる太子登嶽図。上段は太子が黒駒に乗って天空を飛んでいる図である。これは「聖徳太子伝暦」（藤原兼輔撰述，917）に集大成された太子二十七歳の富士登嶽伝説に因むもので，太子は富士山上から善光寺に詣でたと信じられていたのである(註18)。

だから，まいりの仏の黒駒太子も秋山郷の黒駒太子も，善光寺信仰を布教した善光寺聖によって伝播された信仰と考えることができるの

である。

次に初期真宗教団の担い手達とまいりの仏の関連であるが，先に触れたように親鸞の直弟子で二十四輩の1人である和賀の是信の存在が深く関わっていた。会津の太子守宗でも親鸞二十四輩の無為子や唯信，唯仏などの関わりが推定されている。

是信が親鸞の高弟であったことは，良空著「親鸞聖人正統伝」(正徳5年著，享保2年刊)によって一般に知れわっていた。建保6年（1218）親鸞46歳の条に，「今年より五十余歳に至るまで，帰依の御弟子たちは，真壁真仏房，飯沼性信房，鹿島順信房……」とし，全50名中の9番目に「和賀是信房」が登場するのである(註19)。

親鸞二十四輩は，後年，弟子の中から24名を選んだもので，その現存最古の文献は康永3年（1344）の「親鸞聖人門弟等交名牒」（愛知県岡崎市の妙源寺蔵）である。本願寺3世覚如が関東に下向したとき，提出させた連署の写しが現存のものと考えられている。ここに44名の名前が列挙されており，その主だった弟子名も記されている(註20)。

その11番目に「是信　同和賀住」とある。「同」とは10番目の「无為子　奥州会津住」を受けており，「奥州和賀住」であることがわかる。また，後半部にその弟子として，能信，仏道，覚妙の名を挙げ，「自余門弟略之」と記している。これに前述した東和町の熊谷基家蔵の「連座御影」に是信とともに描かれている「釈是明」を加えると，初期の和賀門徒の担い手が見えてくるのである(註21)。

ところで，「親鸞聖人門弟等交名牒」によると，奥州に6名の高弟，① 如信　奥州大網住，② 无為子　奥州会津住，③ 是信　同和賀住，④ 本願　奥州藤田住，⑤ 唯信　会津住，⑥ 唯仏　会津住　がいたことがわかる。

このうち，如信は善鸞の子で親鸞の孫。父親の善鸞が異説を唱えたとして祖父の親鸞から義絶されたので，本願寺2世を継ぐことになり，妹覚信尼の孫である覚如に法脈を伝えて，これを3世とした人物である。現在，福島県白河市の常瑞寺を「大網奥之御坊」「大網御坊」と称するが，如信時代は東白川郡泉崎村に住していたといい，伝承地に善鸞や如信の墓がある。

また，本願のいた「奥州藤田」は現在の福島県郡国見町と考えられるから，6人のうち最北に住したのが是信で，和賀は初期真宗の最前線の布教拠点だったことになる。また，会津には無為子と唯信と唯仏がいたことがこれによってわかる。是信とその門弟，無為子や唯信や唯仏とその門弟，こうした人々によって，まいりの仏や太子守宗のもとになる太子信仰が伝えられ広められたのである。

しかし，親鸞二十四輩時代から遠ざかるにつれて，彼らが布教に用い道場の礼拝仏とした絵像や木像がその道場の持ち主や管理者，すなわちまいりの仏の「仏別当」，秋山郷の「如来さま」，太子守宗の「堂守」のような「毛坊主」的な存在によって守られてきたのである。

柳田国男は「毛坊主考」で，「本朝俗諺志巻四に曰く，飛驒の山中に毛坊主と云うあり。農業木樵をなすこと常の百姓並なり。遥かの奥山にて出家など無き處なり。人死したるときは此坊主を頼みて弔ふなり。代々譲りの袈裟を掛け鉦打鳴らし経念仏してとぶらふこと也。俗人にて坊主の役をする故かく名づけたるなり。此家は代々あり。」といった(註22)が，おおむねそうした姿で信仰が守られてきたのであろう。

また，西会津町の西光寺が「大坂天王寺末寺」を名乗り，縁起を四天王寺と結びつけていたように，法隆寺や四天王寺の太子信仰がストレートに伝わることもあった。

北上市鬼柳町荒堰の花岡友吉家のまいりの仏は，太子像とも親鸞像とも判別がつかない木像（像高21 cm）だが，台座に「御愛願之祥/御法三界/法相宗」とある。拝み日は11月20日で，同市和賀町岩崎の筆者が住む集落の及川マキ（一族）4軒がお詣りに行くが，もとは花岡の本家に祀られていたそうで，カマドを返して北海道に移住したとき，分家に預けたものだという。

ところが，同市上江釣子の花岡谷五郎家にほぼ同一の太子木像（像高24.5 cm）があり，北海道に移住したが失敗し，戻ってきて鬼柳に帰らず上江釣子に落着いたのだという。拝み日は旧

10月7日で，戦前までは岩崎や鬼柳からお詣りがあったそうだ。『江釣子村史』によると，先祖は生国の山城国から下ってきた兄弟3人の修験僧侶で，出羽国羽黒山で修業の後，当地方に定住した。その子孫が当家と当地の萩原二郎家と鬼柳の花岡家だという(註23)。

おわりに

岩手県各地で今も信仰されるまいり仏（十月仏）は，古代から中世にかけての畿内地方の聖徳太子信仰を抜きにすることはできない。「はじめに」でも若干触れたように，聖徳太子は日本最初の自覚した仏教の受容者である。そのため，その聖人化は没後直ちに始まり，平安中期までには太子を救世観音の化身とする信仰が広く行き渡っていた。法隆寺夢殿の救世観音が聖徳太子の等身大に造られたという話は早くから信じられていたが，太子建立の四天王寺が極楽浄土の東門に位置し，その本尊が応現して聖徳太子となり，衆生済度・極楽往生の救い主とされた。親鸞が京都六角堂の本尊である救世観音＝聖徳太子に「後世の事」を祈り，夢告を得て法然の門に転じたのも，平安中期から鎌倉期にかけて盛行した聖徳太子信仰をきっかけとしている。

だから，東国の太子信仰を考える上でも多種多様な太子信仰の伝播を考えることが肝要である。ある時代に一様のものが伝わって成立したのはなく，長い間，種々相の太子信仰が伝播したと考えるべきである。法隆寺や四天王寺・六角堂などの畿内の太子信仰を中心に，初期の真宗教団や高野聖・善光寺聖などの念仏僧が関わり伝播されたものが，この地方の習俗と習合しながら受容され土着化していったのであろう。本稿では，主として善光寺聖と初期真宗の布教者を挙げたが，他にも高野聖，四天王寺や法隆寺の僧なども考えなくてはならないと思う。

［付記］本稿は，日本民俗学会の平成12年度年会（長野県松本市）で研究発表した「東国の太子信仰の一研究―岩手のまいりの仏と会津の太子守宗を中心として―」を原稿化したものである。口頭発表後の質疑で，蒲池勢至氏や岩鼻正明氏から幾つかの御教授を得た。南会津では旧太子守宗の寺院の関係者，地元の教育委員会，資料館の方々にお世話になった。篤く感謝したい。

なお，「東国の太子信仰の研究」調査には，平成11年度盛岡大学研究助成を得たことを記しておく。

註　記

（註1）関連する門屋の報告・論文などには，①「まいりの仏と聖徳太子―気仙地方の聖徳太子信仰を中心として―」（『岩手の民俗』第3号，岩手民俗の会，1982，12-37頁）/②「まいりの仏（十月仏）の祭祀」前篇・後篇（『岩手県立博物館研究紀要』第3号・第4号，1985・1986，前篇97-116頁・後篇121-142頁）/③「『北越雪譜』の黒駒太子―まいりの仏源流再考―」（『岩手の民俗』第7号，岩手民俗の会，1987，48-60頁）/④「仏の月伝承と十月仏―まいりの仏再考―」（『東北民俗』第21輯，東北民俗の会，1987，7-14頁）/⑤「参りの仏（十月仏）と善光寺聖」（『矢沢地区文化財調査報告書』花巻市文化財調査報告書第15集，花巻教育委員会，1989，78-79頁）/⑥「源実朝の太子信仰―二体の聖徳太子像をめぐって―」（『盛岡大学紀要』第14号，盛岡大学，1995，13-24頁）/⑦「源実朝の心象覚書『たゆたう心』」（『日本文学会誌』第7号，盛岡大学日本文学会，1995，3-21頁）/⑧「親鸞の太子信仰」（『盛岡大学研究紀要』第15号，盛岡大学，1996，11-25頁）/⑨「岩手のまいりの仏」（『十月仏・まいりの仏』平成9年度特別展図録，北上市立博物館，1997，17-20頁）/⑩「岩手のまいりの仏と会津の太子守宗」（『東北民俗学研究』第5号，岩崎敏夫米寿記念，東北学院大学民俗学OB会，1997，47-59頁）/他に，『岩手民間信仰事典』（岩手県文化振興事業団，1991）の「聖徳太子信仰」「まいりの仏」の項，『日本民俗大辞典（下）』（吉川弘文館，2000）の「まいりの仏」の項などがある。

（註2）司東真雄編著『まいりのほとけ（十月仏）』北上史談会，1976，58頁。

（註3）司東真雄稿「かくし念仏　御内法」『日本の民俗宗教2』弘文堂，1980，294～297頁。

（註4）前掲『まいりのほとけ（十月仏）』の「序」で，

司東真雄は「十月とした理由は和賀の是信房の祥月であるからというものである。十四日という日を先代の命日に関係なしに定めた家の伝えでは，是信房の命日であるから，といっている。」と記している。

（註５） 司東真雄稿「是信と和賀地方への真宗浸透」（『司東真雄岩手の歴史論集　中世文化編』同書刊行会，1979，194 頁）

（註６） 竹内利美の指摘は，昭和 59 年秋仙台市開催された東北民俗の会・福島民俗学会・岩手民俗の会の合同研究発表会の席上，恵津森智行の研究発表「まいりの仏」の討議のさいにあった。

『改訂綜合日本民俗語彙』には，「ルスガミ留守神。神々が出雲に立たれたあとの留守を守る神。この信仰は広くあつて，所により，オカママか或はエビスサマが留守をするのだという。愛知県知多郡の日間賀島では，出雲への神々の旅立ちのあとは，山の神が来て留守を守るから，十一月七日に山の講をしてお帰しするのだという。」とあって，長野県小県郡長村や静岡県伊豆半島などの留守神の事例が記されている。ルイスガミについても「高知県長岡郡稲生村では，神無月にはオイゲサマとコンピラサマが残つているという。オイゲサマの祭日は旧暦十月三日で，コンピラサマは旧暦十月十日である。コンピラサマもオイゲサマも疱瘡を病んで器量が悪くなつたから御留守をするとのこと。」とある。

（註７） 前掲『まいりのほとけ（十月仏）』56～57 頁。

（註８） 同書 56 頁。また，同書の「序」で，司東は「（真宗の布教は）一族の本家へその一族を集め，その一族にかぎっての説教をし，本尊となるべき九字名号なり六字名号，引つづき阿弥陀如来画像，さらに光明本尊の一部を連座の御影へ加え，自分の家の祖先などに付して絵系図のようにして画きそれを拝ませたのである。それらのすべてを一族の共同所有とし，本家が『仏別当』としてそれらを保管したのである。」とも書いている。

（註９） 「雪国の春」『定本柳田國男集』第 2 巻，筑摩書房，97 頁。

（註 10） 鈴木牧之編撰『北越雪譜』（岩波文庫）岡田武松校訂，岩波書店，1936，102～103 頁。

（註 11） 鈴木牧之編撰『秋山記行・夜職草』（東洋文庫）宮栄二校註，平凡社，1971，71 頁。

（註 12） 参考までに中世銘のある太子像を列挙すると次の通りである。

○正中 3 年（1326）経巻太子七歳像　本郷町・常勝寺（真宗）　寄木造・極彩色・玉眼

○延文 2 年（1357）孝養太子十六歳像　北会津村・西堂寺　一本造・内刳・彫眼

○延文 6 年（1361）孝養太子十六歳像　柳津町・月光寺（曹洞宗）　一本造・彫眼

○文安 4 年（1447）孝養太子十六歳像　小野町・夏井太子堂　一本造・彫眼

○文安 5 年（1448）孝養太子十六歳像　上川村・聖徳寺（浄土宗）　一本造・内刳・彫眼

○天正 8 年（1580）孝養太子十六歳像　会津坂下町・光照寺（真宗）　一本造・彩色・彫眼

（註 13） 『会津堂宇縁起』二十三巻は，会津若松市立図書館蔵写本によったが，藤田定興「会津における太子信仰―太子守宗をめぐって―」（『尋源』20 号，1977）を併せ参照した。

（註 14） （註 1）の拙稿「親鸞の聖徳太子信仰」参照。

（註 15） （註 1）の拙稿「参りの仏（十月仏）と善光寺聖」73～79 頁。

（註 16） 長野市立博物館『古代・中世人の祈り―善光寺信仰と北信濃―』（第 39 回特別展）1998，121 頁。

（註 17） 同書，86 頁。

（註 18） 「聖徳太子伝暦」に，「（太子二十七歳夏四月）甲斐国貢一驪駒四脚白者。数百匹中太子指此馬曰，是神馬也。余皆被還。命舎人調使麿加之飼養。秋九月試馭此馬浮雲東去。侍臣仰観。麿独在御馬右直入雲中衆人相驚。三日之後。廻轡皈来謂左右曰。吾騎此馬躡雲浚直到富士嶽上，転到信濃。飛如雷電。経三越竟，今皈来。」（『聖徳太子全集』第 3 巻，1934，89 頁）とある。

（註 19） 「親鸞聖人正統伝」は，『しんらん全集』（1 伝記，普通社，1950，219～220 頁）による。

（註 20） 「親鸞聖人門弟等交名牒」は，同上書 270～287 頁による。

（註 21） 是信房については，拙稿「是信房と和賀門徒」（『上人塚』　上人塚整備促進会，1997）参照。

（註 22） 「毛坊主」『定本柳田國男集』第 9 巻，筑摩書房，333 頁。

（註 23） 二つの花岡家の祭祀事例は，（註 1）の拙稿「まいりの仏（十月仏）の祭祀」前篇の 109 頁，及び『江釣子村史』（岩手県江釣子村役場，1971）594 頁。